

教育という悲劇、教育における他者：教育のコロニアリズムを越えて

丸山 恭司

フレーザーの場合、彼の精神生活のなんと狭いことか。その当然の帰結として、彼と同時代のイギリス人とは違った生き方が理解できないのだが、それがなんと甚だしいことか。
(ワイトゲンシュタイン、399)

1. 何が問題か

- 教育においてすべてを制御しようとする傾向と植民地主義的人間関係
- 植民地主義 (コロニアリズム)、新植民地主義、ポストコロニアリズム
「植民地的」と「植民地主義的」、「意識」と「無意識」
- 懸念される問題群
- いくつかの教育学者の応答：小玉亮子、森田伸子
- 悲劇性と他者性：バープラス、ヴィマー、田中智志
教育を悲劇と見ることも、被教育者を他者と見ることも、教育をあきらめることではない

2. 関係性としてのコロニアリズム

- 第三世界フェミニズムの問い
「女子割礼」論議と植民地主義
サバルタンは語るすることができるか
- 語らぬ者の声を聴くこと
様々な「語らぬ者」
コトバを知らない者：乳幼児、外国人、被抑圧者
コトバを奪われた者：舌を抜かれたフライデイ (岡)、沈黙させられた子ども (小玉)
語り方を知らない者：文化的マイノリティ
発した声があなたに届かない者：
聞き入れてもらえない者：
聴かれた声は誰の声か
誰がいかにしてサバルタンの代弁をするのか：
想像によって？下層出身者ならば代弁が許されるのか。
ロドリゲスの孤独 (*Hunger for Memory*)
「学習権の代理」という設定
- コロニアリズムと教育的関係
関係性としてのコロニアリズム
「植民地主義的な権力によって保証された自他の想像的な関係」 (岡、286)

研究というまなざし、教育というまなざし

植民地主義の産物である点では、文化人類学も教育学も「教育」も同じ

「一見すると最も平和的な意思表示とみなされるもの、つまり子どもの大人へのパースペクティブそのものをも受容するようになるまで子どもを理解するということは、しかしながらそれは占領という帝国主義的意図であることが判明する」(ヴィマー、134)

―類比的考察の利点と限界

いかなる意味で(語らぬ)子どもはサバルタンか

闘争モデルはどこまで有効か

―教えることの病

―「意図」によっても「結果」によっても正当化されない問題をいかに考えるか

3. 教育という名の悲劇

―悲劇というカテゴリー

典型としてのギリシャ悲劇：エディプス王の悲劇

悲劇論は西洋の一つの伝統：人間の生のあり方のある根本的なもの

「悲劇」「悲劇的」「悲劇的なもの」：日常語の「悲劇的」の幅の広さ

―悲劇とは何か

両義性

人間の傲慢、神への冒瀆が悲劇を生む

近代の悲劇：未来を唱う者はそれを非悲劇的と見なす、しかし、やはり彼らも悲劇を演じる者(悲劇性に気付かぬ者)である

特徴1：思い通りにならないこと(思い通りにならない他者)

思いもかけない自然災害、自分の行動の思わぬ帰結

望ましい結果を求めてひとは行動し、この行動は期待通りの結果をもたらせなかったり、この行動そのものが好ましくないものと他者によって解釈されたりする。

宿命という認識は<神/観客/結末>の立場によるもの、行為者が行為を遂行しているときにこの認識をもつことはない。

特徴2：盲目であること、あるいは言葉による呪縛としての宿命

多義的なものの一面にのみ囚われてしまう

―教育の悲劇性

バーブラスの「教育の悲劇」観

「教育は、夢と希望の仕事ではないか」、それは悲劇の一部。悲劇は両義的である：

ユートピアとニヒリズム；オプティミズムとペシミズム

この両義性を教育の不可避な特性と考える。望ましくない結果が常に何かの過不足から帰結するのではない。

教育に悲劇性を認めることによって、効率性のみを求める教育観の一面性を指摘す

ることができる。

完全な予知の不可能性と悲劇的認識の困難性

いかなる外的要因が影響してくるかを完全に予測することは不可能である。教育行為の結果がいかに解釈されるかも完全には知りえない。また、たとえ、その行為が悲劇的結果をもたらすものであるとしても、われわれはその悲劇の観客となることはできない。ある行為の帰結が悲劇となりうることを予感しつつも、行為のただなかに留まることしかできないのである。行為を終えた時ですら、その悲劇性に気付かずに過ごすことさえある。その行為には初めと終わりがあり、行為の終点を見極めることはできても、その意味するところは延々と続くのだ。

思い通りにならないこと、それは「他者」という視点から教育を捉えることでもある。

4. 教育における他者

—教育における〈他者〉への問い：ヴィマー、丸山

—教育における様々な他者

教える者としての他者、被教育者としての他者、教材としての他者

—他者とは何者か

実在概念としての「他者」：自分以外のもの、他人

集合概念としての「他者」：特性の与えられた（想像的）他者表象

方法概念としての「他者」（方法としてのみ捉えられる他者）：絶対的他者、潜在的他者性

—想像的表象としての他者

他者を名づけることの暴力、ステレオタイプとしての他者のアイデンティティ

—ある医者と患者の物語：権力者の暴力と他者との出会い

神経医サックスは診療所にやってきたレベッカに診断をください。失行症、失認症、感覚及び運動の欠損と衰弱、欠陥だらけのどうしようもない存在。しかし、この医師は診療所の庭で美しい春の日を楽しむレベッカに出会い、完全な人間であると認識し直す。この再認識がなければ、レベッカはその後に演劇界で活躍することはなかった。

「サックス自身の誠実さや意図がどうであれ、あるいは、より正確には、その誠実さにもかかわらず、彼がレベッカにとっては、彼女の豊かな人間性を社会的に抹消しようとする、実に抑圧的な暴力の行使者にほかならなかったということだ。そして、このとき、「医師である」ということは、単に、人が専門的な訓練を受け、専門的な医学的知識を有しているということではなく、そのような暴力をレベッカに対し行使しうることが社会的に容認された存在である、ということになる。」（岡、281-2）

「存在を忘却された者たち。だが、レベッカを救いようのない欠陥人間と診断したとき、医師は彼女の存在を忘却していたわけではない。彼女は、医師の診断の対象として紛れもなく、医師の現前に、医師の思考のなかに存在していたのだから。医師の思考から完全に忘却されていたのは、レベッカが、自分が考えているのとはまったく異なった者としてこの世界に存在しているという可能性であり、彼女の目に映る世界は、医師のそれとまったく別のありようをしているかもしれない、という可能性である。

存在を忘却された者たち。その者たちが、私が想像するのはまったく異なった様態でこの世界に存在しているというその可能性を――言いかえるなら、世界の別の可能性を――、私の思考の外部へと括り出されてしまう者たち。そのような者たちこそ「他者」、ではないだろうか。」(岡、284-5)

―他者と出会うことの原理的な困難さ

「他者」とは、その存在の可能性を私の思考の外部にあらかじめ排除された者たちであるがゆえに、私は、自ら意図して、彼/彼女(ら)に出会うことができない。そもそも、その原理上、私の思考の内部において、出会うべき対象としての存在を欠いた者たちが「他者」であるのだから。」(岡、285)

―なぜ教育において他者を問題としなくてはならないか

教育には、たとえそれが意識されていなくとも、被教育者を支配しようとする傾向がある。被教育者の他者性を問うことによって、この傾向を意識化できるのである。

届きえぬ他者を想定することは、教育をあきらめることではない。それゆえ、教育的関係そのものを破棄するものではない。ただ、届きえていないかもしれない他者、理解しきれていないかもしれない他者(潜在的他者)として被教育者を見ることによって、教育行為の限界が示され、教育のコロニアリズムから抜け出す契機がもたらされることになるのである。

5. 一つの示唆

求められるのは次のことである。あなたがあなたの思考の外部に押しやっけてしまっているために――しかし、そうしてしまうことは原理的に避けられないのだけれども――気づくことすらできない、被教育者の別様であったかもしれない可能性を思いやること。あるいは、被教育者という潜在的な他者の他者性と出会う余地を残しておくこと。この出会いは悲劇として描かれることになる。それは、過去の教育の不成功か、あるいは教育がまだ終わっていなかったことを意味しよう。しかし、この出会いこそが植民地主義的教育関係に間隙を加えることになる。

他方、もし、被教育者を潜在的な他者と見なすこと、あるいは教育を悲劇と見なすことができなければ、たとえその他者性が顕在化したところで、それはわれわれの植民地主義的無意識の間に浮かび上がってはこない。ただ、われわれの強固な「子ども」のイメージを投影し続け、われわれの枠組みのなかで理解/処理しようとするだけであろう。

6. 文献

Arcilla, Rene Vincente, "Tragic Absolutism in Education," *Educational Theory*, vol. 42, no. 4, Fall 1992.

アリストテレス(今道友信訳)『詩学』『アリストテレス全集17』岩波書店、1972年

Burbules, Nicholas C., "Tragic Sense of Education," *Teachers College Record*, vol. 91, no. 4, Summer 1990.

Burbules, Nicholas C., "Authority and the Tragic Dimension of Teaching," in *The Educational Conversation: Closing the Gap*, edited by James W. Garrison and Anthony G. Rud Jr., SUNY Press, 1995.

ドムナック、ジャン＝マリ(岩瀬孝訳)『悲劇への回帰』中央公論社、1987年

柄谷行人『言葉と悲劇』講談社、1993年

小玉亮子『「子どもの視点」による社会学は可能か』井上俊他編『こどもと教育の社会学』(岩波講座現代社会学 第12巻)岩波書店、1996年

小玉亮子「語らない子どもについて語るということ―教育『病理』現象と教育研究のアポリア」『教育学研究』63-3、1996

年9月

小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店、2001年

丸山恭司「教育と他者性－ウィトゲンシュタインの子どもから」小笠原道雄監修、坂越正樹他編『近代教育の再構築』福村出版、2000年

丸山恭司「教育において〈他者〉とは何か－ヘーゲルとウィトゲンシュタインの対比から」『教育学研究』67-1、2000年3月

丸山恭司「名前の作法－固有名の問題圏から教育の倫理を考える－」教育哲学会第43回大会、茨城大学、2000年10月15日

ミンハ、トリン T. (竹村和子訳)『女性・ネイティヴ・他者』岩波書店、1995年

森田伸子「『子ども』から『インファンズ infans』へ」井上俊他編『こどもと教育の社会学』（岩波講座現代社会学 第12巻）岩波書店、1996年

森田伸子「ポストモダンとインファンズ」増淵幸男・森田尚人編『現代教育学の地平－ポストモダニズムを超えて』南窓社、2001年

中村善也『ギリシア悲劇入門』岩波書店、1974年

太田好信『民俗誌的近代への介入－文化を語る権利は誰にあるのか』人文書院、2001年

岡真理『彼女の「正しい」名前とは何か－第三世界フェミニズムの思想』青土社、2000年

Rodriguez, Richard, *Hunger of Memory*, Bantam Books, 1982.

スピヴァク、G. C. (上村忠男訳)『サルバタンは語るることができるか』みすず書房、1998年

田中智志「ポストモダニズムの教育理論」増淵幸男・森田尚人編『現代教育学の地平－ポストモダニズムを超えて』南窓社、2001年

中村善也『ギリシア悲劇入門』岩波書店、1974年

ヴィマー、ミヒャエル (桜井佳樹訳)「他者への問い」ヴルフ、クリストフ編著 (高橋勝監訳)『教育人間学入門』玉川大学出版部、2001年。

ウィトゲンシュタイン、ルートヴィッヒ (杖下隆英訳)「フレーザー『金枝篇』について」『ウィトゲンシュタイン全集6』大修館書店、1975年

矢野智司『自己変容という物語－生成・贈与・教育』金子書房、2000年

矢野智司「『パラドックス』と『他者』と『物語』の教育人間学」増淵幸男・森田尚人編『現代教育学の地平－ポストモダニズムを超えて』南窓社、2001年

山内登美雄『ギリシア悲劇－神々と人間のドラマ』新曜社、1997年